

ボツチくんと嘘つき彼女
その後

やさしい狛犬

ああもう最悪、と私はひとり漏らす。いつからか口癖になってしまったこの言葉は、大抵は他人に向けられたものだが、今は違った。

私は溜息をつきながら革靴を脱ぎ、雨でぐっしよりと湿った靴下もついでに脱ぎながら、ぺたぺたと足音を響かせて脱衣場へと向かった。荷物を置きに自室へ行くのも面倒だったので、とりあえず鞆を洗濯機の脇へと置く。どうせ両親は今日も仕事で夜遅くに帰宅する。それまでに濡れた制服をなんとかしておけばいい。

私は肌に張り付いたシャツを脱ぎ、洗濯機の蓋を開けて、その中に次々と身につけていた衣服を放り込んでいった。胸元で結ばれた赤いリボン、紺色のレース素材のブラジャー、黒いプリーツスカート。最後にブラジャーと揃いのパンティーをするりと脚から抜き取って、そのクロッチ部分が今まで見たことのない色で滲んでいることに気付き、かあと顔が熱くなった。

私の初めてを証明する赤。そして彼の快感を証明する白。それらが混ざり合って生み出された可憐な桃色は卑猥な匂いを放っていて、これは絶対に誰にも見せられない秘密の色彩だ、なんて思いながら照れ隠しに蓋をばたと乱暴に閉めた。洗剤を投入口に注ぎ、きゅつきゅと水道栓を緩め、あつ、とあることに思い至ってスタートボタンを押しかけた指が止まる。

……そういえば精液は洗っても落ちないとか何とか、そんなことを聞いたことがあるような気がする。……パンティーだけ取り除いて捨てるべきだろうか？ 首を傾げるも、取り除いたところで今すぐ捨てる気にはなれないようにも思う。なぜならあれは、私の初めての記念なのだから……。

裸身で精液と血液のついたパンティーに思いを馳せていると、つくしゅ、とくしゅやみが唇の中で小さく破裂した。私は慌てて思考を放棄し、スタートボタンをえいと押した。そのままがらりと

浴室の扉を開け、ぐいっとシャワーのハンドルを回す。途端、熱い飛沫が私の裸体を清め、冷えた肌に温もりを与えていく。額を、頬を叩くその飛沫の強さは、バス停へと向かうまでに浴びた冷たい雨を思い起こさせた。

追い出されるようにして車から降ろされたあのととき、私は走りながら泣いていた。あんな男が好きだったわけではない。ただ、あんな男に期待してしまった自分に失望したのだ。

雨が降る中、誰かが迎えに来てくれるなんて記憶、私の中にはない。いつも、父も母も、誰も来てなんてくれなかった。だから私は雨がやむまでそこにひとりでいるしかなかった。あの男が、私がずっと待っていた人なのかもしれないと思ったのに。現実には本当に最悪で最低だ。

もし風邪を引いたら、仕返しに風邪をうつしに行つてやろうか——と考え、いや、もう顔も見たくない、という結論に達する。

そんなつまらないことに時間を割くよりも、ボッチくんをからかう方がずっと楽しい。顔を近付けるだけでどきつとしたように目を大きくして、視線が交われれば頬を赤くしてそっぽを向くボッチくん。

「……ボッチくん……」

私は眩き、知らず、壁に掛けられたシャワーヘッドの丸みを指でつつと辿っていた。そう、確か彼の亀頭はこんな丸みを帯びていた。とても硬くて……熱くて……。

つい一時間ほど前の出来事だというのに、もう懐かしく感じるあのときの記憶を再び手の中へと取り戻すように、私は熱く丸いそれを撫でる。自然と目が潤み、ステนレス製のただの丸い無機物であるそれを、愛しく見つめてしまう。

ハンドルをきゅつと元の位置に戻してお湯を止めると、小さな穴からぽたぽたと水滴を垂らすその様がカウパーの滲んだ彼の鈴

口を思い起こさせ、「はあ」と艶めかしい吐息が唇からこぼれた。そつと指を絡ませるようにシャワーヘッドを壁のフックから外すと、優しく愛しくヘッドの丸みを手のひらで撫でた。そうしていると本当に彼のものであるような気がしてきて、私は目を閉じて「……んっ」と甘く声を漏らしながらちゅつとヘッドの丸みに口づけた。お湯の温もりを保ったその硬く丸い物体は、視覚を遮断すればより本物としか思えなくなる。

私は自然と舌を這わせ、同時にステンレスの苦みを感じて、ああもつと、彼のあそこは汗の酸っぱさと肌の甘さが交わった複雑な味がした、なんてことを思い出しながら、手の中のそれを唇と舌で愛撫した。

ちゅ、ちゅつ、と唇の奏でる音楽が浴室にこだまし、ぬるりと這う舌がステンレスの丸みを妖しく光らせ、そつと瞼を開ければ輝く銀色のボディに発情しきった少女の顔が映っている……。

それは雄の味を初めて知り、自身の中に生まれた淫らな欲望を持て余す、卑猥な一匹の雌の顔だった。そして思う。やはりボツチくんを無理矢理に家へ連れ込まなくて良かったのかもしれない、と。こんな顔を見せてしまったら、きつとまた逃げられてしまう。

駅方面へと向かうバスに一緒に乗り、私を自宅のマンションの前まで送り届けた彼は、じゃあ、と逃げるように帰ってしまったのだ。道中、大して雨も降っていない中、相合い傘をしながらずっとおっぱいを腕にあてていたのがいけなかったのかもしれない。ボツチくんが自分のズボンの前をしきりに気にする姿が可愛くて、ついそんなことをしてしまったのだが、彼は「うち、今日、親いないよ？」という私の一言にすっかり動揺してしまい、もうマンションの前にまで来ているというのに私に傘を押しつけて、走り去ってしまったのだ。

濡れて色を変えていく彼の背中をひとりぽつんと見送るしかない

かった私は、思ったのだ。ああ、もう最悪、と。失敗してしまった。ボッチくんを手に入れるには、もっと慎重にならなければいけないかったのだ。

次からはおっぱいをむやみやたらとあてたりせず、ふわっと掠めるくらいにしよう。ノーブラで後ろから抱きつくのもいいかもしれない。

きつと彼は顔を真っ赤にして逃げようとするだろう。そんな彼を私はもつと抱き締める。逃げないように、強く、強く……。

「……んっ、ん……」

はあ、はあ、と息を乱しながら私は唾液まみれになったシャワーヘッドを指でくるくるとなぞる。彼は先っぽを擦られるのが気持ち良いみたいだった。感じきった彼の表情を頭の中に思い浮かべながら、私はヘッドの丸みを擦るように指を動かす。

唾液でぬめる指がいやらしく糸を引いた。まるで本当に先走り

液でヌルヌルになった亀頭のようなようだ。

「っああ、ボッチくん……、あ……ああ……、ん……、好き……好きだよ……きみもこれ、好きでしょ……？」

キスマークがつきそうなほど強くちゅうちゅうと吸いながら、激しくヘッドの丸みを擦る。自然と臍が揺れて、交尾をねだるように身を振ってしまう。

「好き、好き……いっぱい好きなこととしてあげる……だから、好きになつて……えっちな理砂を好きになつて……」

発情しきった声でそうおねだりしながら、私はヘッドを擦っていた手をするりと下に這わせた。ステンレス製のホースは蛇腹のように凹凸があつて、欲情した指先にはそれすらも生き物のもつ複雑な輪郭に感じられる。

「あ……っ、あ、理砂も、理砂もくちゅくちゅされたい、くちゅくちゅして、くちゅくちゅしてください……っ」

ヘッドから垂れてきた唾液がホースの蛇腹に絡みつき、獲物を狙う蛇のように輝いている。

私はシャワーの取り付けられた壁に背を向け、シャワーヘッドに熱い口づけを施しながらホースを跨いだ。片手でぐいと大きくホースを胸元へと引くと、弛んだホースが太股に触れながら股へとぴたりと寄り添った。「あ」儚い声が唇から散って、視界がとろりと溶けたようになる。欲深い指先はもつと、と刺激をねだるように更に上へとホースを持ち上げ、長い蛇腹のそれが割れ目へと沿うようにしておさまった。

「あ……あ、あ……だ、だめ……えっち、すぎる……えっちすぎるの、これ……」

はふはふと喘ぐ息を漏らしながら、私は試しに腰を小さく前に振ってみた。途端、物凄い刺激が秘裂全体に駆け抜けて、「ひやあああんッ」と淫らな絶叫をあげてしまう。慌てて、唇を手のひ

らで覆った。だが、蛇腹に刺激された陰唇がどつくんどつくんと心臓のように動いている。

まるで機械式の人工蛇が女性器に絡みついていていくかのような心地だった。獲物をしとめる——私を絶頂に導くまでは絶対に離れないという強固な意志すらも、その硬さ越しに錯覚してしまう。

「あ……ッ、ああ……んッ、あッ、ああんッ……」

艶めかしい声をあげながら、私は絶対に人には見せられない秘密のダンスをひとり、熱く湿った浴室で踊る。蛇腹の溝には私の膣穴から溢れた蜜液が溜まり、じゅぷじゅぷと交尾の音を立てながら泡立っている。目がとろんとして、視界が定まらない。発情した雌の醸し出す匂いと熱気でのぼせてしまいそうだ。

「あッ、あッ、あッ、あッ」

小刻みに腰を動かしながら、ホースをぐいと上に引く。根元から勃ち上がったクリトリスに硬い蛇腹が擦れ、「んひい」と哀れな

声が漏れる。ぷっくりとした小陰唇が大胆に擦られ、頭がおかしくなりそうなほど気持ちが良い。

ッ、ハッ、ハッ、と獣のような下品な吐息が唇から絶え間なく紡がれ、自分が下等生物に堕ちた心地になる。余ったホースは豊かなおっぱいの間に挟み、シゴくようにする。それすらも淫靡な遊戯のようで、くらりとした。自分の行為に酔いながら、私はシヤワーヘッドに愛を囁く。

「あ、ああ、好き、好き、好き、好きだよ、ボツチくん、可愛い、可愛い、好き、好きなの、あ、ああ、理砂を、理砂を好きになって、こんなにえつちな理砂を好きになって、ボツチくんのためにもつといやらしくなるから、もつとえつちなことを頑張るから、だから、理砂を好きになって、好きになって、理砂とまたおまんこして、理砂のおまんこをいっぱい好きになって……」

囁きながら、ぢゅつと強くヘッドの丸みを吸ったとき、熱い快

感が軀の芯を駆け巡った。蛇腹に擦れた肉の花びらが大きく震え、ぎゅつとホースをくわえ込むように動き、大陰唇がぽつと火照り、膣穴からどぷッ！ と吐精のようなとろみのある雌蜜が溢れ、ホースをシゴいていたおっぱいの先っぽが甘く痺れた。

「あッ、ああああッ、あああああんッ！ あッ、い、イクッ！ イッちやうッ！ あッ、い、いくいくいく……ッ」

ぎゅつと太股を締め、ホースを強く挟み込んだ。甘い、凄まじい快感が何度も何度もクリトリスからお尻の穴まで駆け抜け、全身がガクガクと震えた。

ようやく絶頂しきった頃には脚に力が入らなくなっていて、私はぺたんと床に座り込んでしまった。

未だどくんどくと鼓動する秘唇がどのような状態になっているのかを知るべく、ゆつくりと体勢を変えてそつとホースを外すと、そこはずつと深く絡み交わっていたせいでひどく粘つき、繫

ぎ合わせればハンカチ一枚くらいは織れそうなほどの糸を恥ずかしげもなく紡いでいた。

蛇腹が生み出した小さな大量の泡が、肉の花びらをまるで飾りたてるように点在し、照明の光で輝いている。散らばった宝石のようなそれらを指で撫でれば、ひっくん、ひっくん、と未だ絶頂の余韻に浸る膣穴から新たな体液がこぼれ落ちた。

それは私がひとりでつくりだしたと言うには少し色が濃厚すぎた。恐らくさきほど私の奥深くで吐き出した彼のものが、今の刺激でようやく外まで出てきたのだろう。

私はそれを指ですくい、うつとりと眺めながら、彼の精液はお持ち帰りできたけれど、彼自身はお持ち帰りできなかったな、なんてことを考える。

情欲を発散し、興奮がひとまず落ち着くと、次第に臍が冷え始めてきた。私は再びくしゃみが出る前に手早く臍を洗い清め、浴

室を出た。すると同時に、洗濯機の脇に置かれた鞆のポケットがブー、ブー、と震えていることに気付く。

軀を拭くことも忘れて私は濡れた手のままポケットに手をつ突っ込み、スマホを取り出した。画面には見知らぬ番号が表示されていて――やっぱり彼だ、と浮かれながら画面をタップしようとしたとき、バイブも止まってしまった。

ああ、もうちよつとで出られたのに――、と悔しい思いに身悶えていると、どうやら電話の着信ではなかったことに気付く。

――どういうこと？ と画面をスワイプすると、普段は全く使わないメッセージのアプリに新着を知らせる表示が出ていた。

……今時、ショートメール……！　なんで！　電話してよ！

番号教えたんだからさあ！　とどういう種類の怒りなのかわからない感情を抱えつつも、彼から届いたメッセージを確認すると、そこには一言『風邪、引かないように気をつけて』とだけ記され

ていた。たった一言、たった一言だけだったが恐らくこの一言を送るのにボツチくんは多大なる時間と思考を費やしてくれたのだろう。私が淫靡な遊戲に耽っていたとき、彼は懸命にこの至極真面目なメッセージを練ってくれていたのだ。共通するのは私も彼も、お互いのことを考えていたということ。

私は『風邪引いちゃったみたいだから看病しに来て』というメッセージを送ろうとして——その前にやらなければならないことに思い至る。彼の番号を電話帳に登録し、名前の欄には『ボツチくん』ではなく彼の本当の名前を打ち込む。

だって彼はもうひとりぼっちではないのだから。

了

二〇二四年二月十六日

やさしい狛犬